

第 5 節 労働者と機械との闘争

・P415～P416、10 行

資本家と賃金労働者との闘争は、分業、協業により雇い主(資本家)が誕生して以来始まって、それはマニファクチャ時代も続いた。(雇い主は労働者を安く使うために、一方の労働者はそれに抗するために)

それが、機械の導入されたことにより、労働者は労働手段(機械)と資本の物的存在様式(建物、備品等?)に反逆する。

・P416、11 行～418、10 行

その例(機械破壊者(打ちこわし)(ラッドイト)運動)を記入している。

※ラッドイト運動は、1813 年参加者多数の絞首刑、流刑で鎮圧。

シドマス→イギリスの政治家。機密院議長、内閣大臣を歴任。民衆運動に強圧的
カッスルレー→イギリスの政治家。ナポレオン打倒に傾注。

ジャコバン派→フランス革命期の政治結社。

しかし、これら運動は、機械を資本主義的使用から区別し、労働者の攻撃は、物的生産手段(機械、建物等)でなく、搾取形態であることを、まだ理解していなかった。

・P418、11 行～P419、6 行前

マニファクチャ内の労働賃金闘争は、マニファクチャありきであって、マニファクチャの存在には向けられていない。マニファクチャの形成に闘争するのは、同職組合の親方、特権都市(領主が特権を与えた町)であり、賃金労働者でない。

マニファクチャ時代の著者(学者?)達は、分業は主として労働者に代わる手段(機械化?)として考えられているが、労働者を駆逐する手段とは考えていない。

この区別の例として、今日50万人によって今の機械で紡がれている綿花を昔の機械で紡ぐためには1億人必要であろうが、それは、今の機械が9950万人を解雇したということではなく、(労働者に代わる手段として)機械装置に代えても労働者は必要だということを行っているだけである。これに反して、今の蒸気織機が80万人の織物工を解雇したと言うならば、その代わりをするには一定の労働者数を必要とするような現存の機械装置を言っているのではなく、機械装置によって代替、駆逐された今の労働者数を言っている。

・P419、6 行後～P420、16 行

マニファクチャ時代には、手工業的経営(家内工業)が、分解されたとはいえ残っていた。新たな植民地市場(原材料産地)は、以前からの都市労働者では充足せず、土地から駆逐された農民も充てた。当時、作業場では、従業労働者を増やすことだった。協業と資本家の持っている機械の結合は、それが農業に応用されれば、多くの国の農村住民の生活条件と就業手段の変革を引き起こす。しかし、この変革への闘争は、大地主と、小地主との間のことである。他方、労働者は、羊、馬、機械装置に駆逐される。さらに、機械装置が増えることにより、小地主から奪った土地で大農業へ変革していく。これは、政治革命の外観を呈する。(資本主義への片鱗ってこと?)

・P420、17行～P423、10行

機械装置と労働者は競争している。機械の増は、機械によって生存条件を破壊される労働者を増やす。資本主義的生産は、労働者が労働力を商品として売ることに基づいている。分業は、この労働力を一工程の熟練工とした。この工程が機械化されると労働力は不要となり、労働者は労働力を商品として売れなくなる。機械装置により過剰になった労働者が、古い手工業や家内工業等の産業へ押し寄せ、労働市場が溢れて労働力の価格を価値以下に低下させる。貧民化した労働者にとって一つの大きな慰めは、一部は彼らの苦悩が単に「一時的」であること。(手工業等へ雇われた人達のこと？それとも死ぬこと？)また、一部は、機械の占領が徐々(順番)に行われることによって、労働者の窮乏も徐々(順番)に行われること。しかしその慰めは、機械は労働者に慢性的窮乏を強いることになる(あだにする)。(次に、イギリスの木綿手織工の例を記入している。)

(注釈の前の行は、ラッドライト運動のこと?)

P423、11行～P427、5行

機械装置が労働者をうち殺す(窮乏化させる)。同じく、機械装置が、手工業経営を(下請化し)抹消する。しかし、大工業(マニファクチャ)内でも機械装置の発展により同様の作用をなす。(廃業や吸収合併のこと?)

機械装置改良の不変の目的は、労働力を排して、機械装置のみで商品を完成させることである。従来手で動かされていた機械装置に蒸気力や水力を応用することは、今は常識である。動力の改良、製品の改良、生産増加、機械装置の改良は、絶えず行われており、それは一見あまり重大なことに見えないが、重要な結果をもたらす。ある作業が、多くの熟練を要する場合、あまりに熟練作業過ぎて不規則(作業時間の長短等)になるから、この作業を規則正しく作業する特別の機構(機械装置群?)にし、労働者はその監視に充てる。自動的体系(特別な機構?)においては、労働者の才能(熟練度)は、だんだん駆逐されていく。機械装置の改良は、従業成年労働者数の減少のみでなく、他作業への配置替えや、熟練度不要(高い者から低い者へ)、年齢・性別不問(成人男性から児童、女性へ)にし、労賃の引き下げとなる。→機械装置はたえず成年工を工場街に投げ出す。

(以降、イギリスの工場監督官の報告から実績が記入されている。)

P427、6行～P430、3行

※アメリカ南北戦争 1861年～1865年

1861年から1868年338の木綿工場が消失した。これは、より生産的で大規模な機械装置が、より少数の資本家に集中した。機械も減少したが、生産物は増加した。(機械装置の大型化。)生産物は増加したが、従業労働者数は減少した。機械装置の急速で継続的な進歩は、労働者の窮乏化を一時的なものから固定化されたものにした。

機械装置は、賃金労働者を「過剰」にすることだけでなく、労働者の反乱、ストライキ等を鎮圧する武器ともなる。発足し始めた工場制度を危機に追い込もうとした労働者の要求(ストライキ?)を、蒸気機関への発明で粉碎した。1830年以來のそれらの発明を

示すこともできるが、特に一新時期を開く発明として自動ミュール紡績機を上げる。(注210 機械製造工場でのストライキの結果、機械製造のために機械の応用について、2・3の重要な発明をなした。)

※ギヤスケルーイギリスの女流作家。貧民の生活に接し、工場の労使紛争を扱った。(日本の「女工哀史」的なもの)

P430,4行～

蒸気槌の発明者ネイスミスの陳述でも、ストライキによる機械の改良と成果を記入してある。

ユアは、(発明、改良された)捺染機は、資本家たちに、労働者からの反逆を克服するものとなった。また、経糸糊付けのための一発明も、労働者(古い分業戦線の～不平家の群)に、その機械の発明により反抗できなくなり、工場を去った(無条件で降伏せねばならなかった)。(解釈、発展させすぎか?)また、自動ミュール紡績機の発明も産業諸階級間の秩序を回復させた。資本は、機械の発明・改良により、労働の反逆的な手を屈従させるという学説が確証された。

ユアの著書が現れたのが1835年で、工場制度が微弱な時だったが、その著書が工場経営の基本(合理化)を見失わないのは、彼が資本の考えを、整合性ないままに記述しているからである。(次の※を参照に解釈)

※無思想的矛盾→(左の字句で検索でなかったが)無矛盾は、一見正しいと思うが整合性がないこと。例—1.ペーパーレスにご協力ください。という紙を配布。2.アナウンサーが「不要不急の外出は控えてください」(番組最後に)「それでは、行ってらっしゃい」
※表白—表明。「ひょうひやく」との読みでは、仏語で仏事等集会で導師がその集会の趣旨を参加者に告げ知らせること。

ユアは、資本は機械装置の発明、改良で労働の反逆的な手を屈従させるとの学説の後に、機械物理学が資本家の専制に手を貸し貧民階級を抑圧していると、ある種の方面(労働者?学者?)からの批判に怒っている。また、機械装置の発達が発達が労働者にとって有利であると説教した後で、労働者の反抗やストライキ等が機械装置の発達を促進すると警告している。さらに、労働者の反抗、ストライキ等は、自分自身を死刑にするようなものだ。逆に、労働者の反抗等なければ、工場制度は急速に発達し、全ての関係者(資本家、労働者?)に有利だったことだろう。工場地区の住民にとって幸いなことは、機械の改良は徐々にしか行われない。機械は成年工の数と賃金を下げると非難されるが、児童労働の需要を増やし、賃金率を高めるのである。

また、ユアは他方で児童の低賃金を弁護して、子供を早くから工場にやることを、両親に控えさせる。と言ってるが、彼の著書全体が無制限労働日の弁明書であり、児童の酷使労働を禁止する法律以前の暗黒時代の考えが見える。また、一方で機械装置によって、労働者に「彼らの不滅の利益について塾考する暇を作ってくれた」(失業?)神に感謝の祈りをしなさい。と言っている。